

『主を覚え、死を忘れるな』

2019年10月05日

N・Kさんが「読んでなかったら、読んでみて」と、兩宮栄一先生の『主を覚え、死を忘れるな カール・バルトの死の理解』を貸してくれた。読んでみて、以前、読んだと思い出したが、私も大病を経験したので、以前とは違い、惹き込まれて読んだ。バルトは膨大な『教会教義学』を始め、諸々の神学書を著わし、20世紀最大の神学者と言われ、教会に大きな影響を与えた方である。私たちの神学生時代、最も読まれていた。今回、兩宮先生を通してのバルトの老い、病、死の理解に深い感銘を受けたので紹介したい。

バルトは、人間が老人になるということは、自分の生を「永遠の相のもとで」見ることを可能にし、それが、老人になって理解できる特権であると言う。具体的に言えば、キリスト者は神の約束と戒めへの服従を目指して生きているが、老いることによって、生き方がより純粋に、より真剣になる。なぜなら、老いが自分の無力、非力を深く自覚させ、それが神信頼を強いものにするからである。若い時には、十分に見えなかった神信頼の生き方が、無力、非力を知れば知るほど、自覚的で、明確になる。老いることは単なる老化でも、経験による知恵を身につけることでもない。神のあわれみによってのみ生きるという聖書の使信を深く知りうる恵みの時である。老いは何と素晴らしいではないか。老いて行く分、神への近さを自覚し、喜ぶ信仰を得たいものである。

バルトは晩年苦しんだ病い（糖尿病、前立腺障害、脳梗塞）が、神の誠めへの服従が叶わず、阻害させるものであることを経験した。「病い」は、神から貸与された生を、畏敬を持って生きようとする人間にとって否定できない「現実」であり、神の創造に対する反乱を意味する無秩序、混乱として現れる。「病い」は、死の前形式であり、先駆者であるから、「否」を言い、抵抗することが神の意志への服従である。しかし、「病い」は自分の生が限定されていることを示し、神のみ手の内にあり、神によって支えられていることを知る。病いとは闘わなければならないが、創造主なる神の慈愛の一形態であることを認識する。そこで、「病い」が「永遠の命の前形式」であることを自覚させられる。病いを得て、自分に残された日を数え、なお、神が希望であることを告白するのである。

バルトは、自分の生を誕生と死の間に限定された、初めがあり、終わりのある「一度だけの機会」として捉えている。限定づけられた生を生きる時、3つの基準があると言う。

- ① 限界ある時間を、最大の開放性と決意性をもって生きることを基準とすべきである。隣人の声に耳を傾けると同時に、自分自身の道を主体的に決意して選択しなければならない。
- ② 限界ある時を生きるのだから、「時を大切に生きる。」バルトの研究室の前には「あなたには時間がありますか。私は終末論的に生きています」という掲示がかかげられている。
- ③ 自分が死ぬであろうことを常に熟慮しており、しかも死ぬことを恐れぬ。死を熟慮することは修道院で交わされた「死を憶えよ（メメント・モリ）」ということである。しかし、この言葉の背後に「主を憶えよ（メメント・ドミニ）」がなければならない。主を憶えつつ死を憶える。主を記憶する中で、死を記憶する時、死を熟慮し、生は主が与えて下さったもので、主が死をもって贖い給うた生であることを知る。人は自分の死に方、この世からの退去について、いかなる展望も、処理する能力も持っていない。全ては神の御手の内にある。死とは、主が待ち受けて下さり、出会って下さり、そのように招いて下さる時である。だから、一度だけの機会を意味あるものにしようと、感謝して生きるのである。バルト神学はキリストによる「然り」、全てが神の恵みの中にあるという喜びである。